

子どもと共に育つ：放課後児童クラブボランティア の取組み

長安, めぐみ
群馬大学ダイバーシティ推進センター：講師

新藤, 慶
群馬大学共同教育学部：准教授

木村, 素子
群馬大学共同教育学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/7347385>

出版情報：ポリモルフィア. 7, pp.75-81, 2022-03-17. Office for the Promotion of Gender
Equality, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



活動報告

子どもと共に育つ～放課後児童クラブボランティアの取組み

長安めぐみ 群馬大学ダイバーシティ推進センター 講師
新藤 慶 群馬大学共同教育学部 准教授
木村素子 群馬大学共同教育学部 准教授

1. はじめに

群馬大学共同教育学部専門科目体験的科目「放課後児童クラブ活動ボランティア体験」について報告する。

放課後児童クラブ（かつての学童保育）は、放課後児童健全育成事業—『小学校に就学している児童であって、その保護者が労働等により昼間家庭にいないものに、授業の修了（原文ママ）後に児童厚生施設等の施設を利用して適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全な育成を図る事業』—の実施場所を指している」（澁谷2019）。全国学童保育連絡協議会と学校基本調査データで試算すると、小学校に在籍している児童の約20.7%⁽¹⁾が放課後児童クラブに在籍していることになる。学年別の在籍率では、学年が下がるにつれて増加し、特に、小学校1年生では、約4割近くが在籍している。保護者にとっては「小1の壁」と呼ばれる共働き家庭が抱える保育園から小学校へと進学する際の困難を乗り越えるための社会資源の一つであり、子ども達にとって、遊びと生活の重要な場となっている。

2. 講義設立までの経過

今回紹介する本科目は、2018年度より教育学部（2020年度より共同教育学部）の専門選択科目の講義として設置された。本学の名誉教授が運営する近隣のNPO法人「群大クラブ」と連携して行っている。群大クラブは、スポーツ教室や英会話教室などでの活動を行うかわら、「パレイストラ」と呼ばれる放課後児童クラブの運営も行っている。「パレイストラ」とは、ギリシア語で、心身・調和のとれた児童を育てる「教場」を意味する。現在、群馬県前橋市立南橋中学校の校区内にパレイストラ関根、パレイストラ荒牧、パレイストラ南橋と3か所が設置されている。

本学では、2014年度、2015年度と男女共同参画推進室が主導する夏季休業中1日だけの体験型の学童保育を独自に実施してきた経緯があり、その際も、教育学部等の学生が支援者として協力する体制があった。しかし、学内教職員の要望としては「夏休みだけでも教職員の子を預かってもらう場がほしい」というものであり、短期間ではニーズに応えられない現状があった。そこで、上記の近隣の放課後児童クラブと連携し、2017年度より本学の教職員に限って、通常の入力に加え、

夏期休暇のみのプログラム（学区外児童を含む）の提供を、保護者による送迎を条件に実施してもらうことになった。希望する児童は、保護者とともに始業前にクラブへ通所し、終業時までクラブで過ごし、保護者のお迎えを待つこととなった。現在まで5年間で延べ28名の児童に対応している。

本体験科目はその翌年2018年度より開講された。放課後児童クラブとしては、体験者の学生の参加によって長期休業中の指導員の補助をする人員の確保にもつながった。科目担当は共同教育学部の教員が行い、ダイバーシティ推進センターでは、主に科目の調整を行っている。2018年度は7人、2019年度は6人、2020年度は38人、2021年度は55人と年々受講者数は増加している。

3. 体験的科目の内容

- (1) オリエンテーション：放課後児童クラブとは、放課後児童クラブの活動について
 - (2) 現地説明会：各施設の見学、子ども達やスタッフとの顔合わせ
 - (3) 体験（主に夏季休業中に実施）18時間：活動体験実施簿の提出（各体験につき1部）
実習時間帯：夏期8：00～18：00
平日14：00～18：00
 - (4) 報告会：パワーポイント等を利用した活動報告
- *単位修得の条件：15コマ分の授業・体験に出席し、「活動体験実施簿」、「振り返りレポート」等の課題を提出すること。
- 放課後児童クラブ活動ボランティア体験を受講

する学生は、学部2年生が主になっている。秋に実施される教育実習の前の時期になり、子どもとのかかわりの体験が少ない学生が多い。そのため、初日の活動体験は大変緊張するようである。そこで今年度から現地説明会において事前に実習日をグループ分けし決定している。グループになっていることで、緊張を和らげることにつながり、学生同士が連絡を取り合い、助け合える環境を準備した。

4. 活動体験実施簿から

本年度（2021年度）は受講学生の数が多く55名にのぼった。事前のグループ分けの効果もあり、学生はスムーズにボランティア体験に臨めた。活動体験実施簿から様子を紹介する。

(1) 現地説明会

現地説明会は、実際の施設を見学し、子ども達に初めて出会う機会となる。少しでも慣れるようにと、1時間ほど子どもとの交流の時間を持った。緊張した面持ちの学生達であったが、はち切れんばかりの元気な子ども達と出会い、初めての交流を深めていた。以下は学生の様子である。

- ・児童クラブは地域や学校と密接に関わっていて、子ども達の成長に欠かせない存在であることがわかった。
- ・教員としてではなく、保護者の目線から子ども達と接しなくてはならないと考えた。自己紹介の時、緊張で顔が強張ってしまい、怖い印象を与えてしまったかもしれない。
- ・送り迎えや子ども同士の遊びの際に、トラ

ブルが生じ、けがをしてしまう危険性があることに言及されていた。

- ・児童クラブの子ども達と信頼関係のできていない状態からどうやって仲良くなるのか少し不安に思った。
- ・実習時にどぎまぎしてしまうことが多かったため、体験実習を通して関わり方のコツを学べたらと考える。50名の子どもの名前を覚えるが、名前を呼べるというのはコミュニケーションを取るうえでとても大切なことなので頑張りたい。

(2) 体験初日

体験初日は、多くの学生が夏休み前の夕方の14:00～18:00の時間帯に実習を実施した。数人のグループで3つの施設に分かれての実習となる。いずれの施設も大学から近く、徒歩もしくは自転車で行くことができる距離にある。平日の午後は、通常の保育の時間帯であり、保育の内容は、学校まで子ども達のお迎え、施設での受け入れ、宿題、おやつ、自由遊びの時間帯をいっしょに過ごすことになった。初対面の児童とどう関わればいいのか戸惑った学生も多い。最初の出会いの場は、お迎えの時の交通安全の指導であったが、学生はそれぞれ印象に残ったことを記録している。

- ・下校の際に車道に出てしまう子がいて、注意する際どうすればいいのか迷った。
- ・実際に子ども達と接していく中で、子ども達の相手をする事の難しさを痛感した。
- ・事前に聞いていた通り、子ども達の行動は本当に予測不可能で、暴れまわる子から静かに本を読む子など、その姿も本当に多種

多様であった。

- ・楽しい気持ちと不安な気持ちがあったが、短い時間の中でも子ども達の実態や関わり方などについて多くの学び、気づきを得ることができた。
- ・初対面の子ども達と関わり、打ち解け方や話し方、関わり方を学ぶことができた。子ども達がだんだん心を開いてくれるのを体感できたことはとてもうれしかった。
- ・遊びでは子どものテンションに合わせて遊ぶというのがかなり大変なのだ実感した。
- ・児童は元気いっぱいだったので体力が後半きつくなったのと、ずっと笑顔で接することを意識しすぎて疲れた。
- ・カッとなって暴力的になってしまう児童がいて、その子にとって何が気に障ったのかが分からず対処もうまくできなかった。普段から些細なことが気になる子なのかもしれない。
- ・喧嘩が起きた時、お互いの意見を聞きつつそのうえでお互いが納得できるような案を出すことができなかった。喧嘩が起きた時の止め方ある程度自分の中でシミュレーションしたり、消極的な子に自分から声をかけてみたりとできるだけ改善したい。

(3) 体験2日目

体験2日目は、子ども達が夏休みに入った後になり、実習の時間も11:00～18:00の7時間と長くなった。子ども達とのかかわりを想定して、自作のお弁当を持参する学生もあり、それぞれが工夫をして、実習に臨んでいる様子がよくわかる

記述が多い。

- ・子ども達が道に出て事故やけがをしないように一人ひとりに目を配る必要がある。
- ・大きな広場での活動では、自分の持ち場以外の子ども達と触れ合える機会が中々なかった。室内活動の時、積極的に話しかけに行くことができたのはよかったと思う。
- ・ある男の子が友達のことと怒り、その対応をしたが、子どもの気持ちや事情を分かってもどう声をかければいいのか分からずその子をさらに怒らせてしまった、うまい対処がわからなかった。
- ・動き回る子どもや危険な行動をしている子どもへの対応である。しっかり声掛けを行い、しばらくそばで見守るなどの対応ができた。
- ・今回は今から自分が何をするかこまめに声に出して子ども達に聞こえるようにした。そうしたら以前のようにバラバラになってしまうのではなく、みんなで一つずつやってから次の遊びに移ることができてよかった。
- ・時間の使い方がとても難しい。性別や年齢に適した遊びを提供できる環境が子ども達の満足した活動につながると考える。
- ・学年によってできることが少しずつ変わってくるため、接し方やどこまで手伝えるべきかを考えて行動する必要があると思った。

(4) 実習3日目体験終了

実習最終日に学生達は、自分達の専門分野を生かした遊びを子ども達へ提案するという課題が出

されたそうである。例えば、国語科の学生は紙芝居を練習して、子ども達へ披露したが、低学年と高学年では対象の作品も違うため、なかなか難しく学年の差を実感したとのことだった。全18時間の実習であったが、学生達はたくさんの貴重な経験をさせてもらったことが体験実施簿の記録から読み取れる。3日目になると子ども達との距離も縮まり、それぞれが子ども達とのかかわりを振り返って感想を書いているのが印象的である。

- ・子ども達に自分たちが計画したものに興味を持ってもらうことがいかに難しいかを痛感した。
- ・前回同様、自分から声をかけることができなかった。自分がダメといってもあまり相手にされず先生が叱ると止まるのはやはり信頼関係があつてのものだと思った。
- ・難しいと感じたのは、何人かの子ども達に「一緒に遊ぼう」と誘われた時に順番に遊ぶということを理解してもらうことである。
- ・喧嘩などのハプニングが結構あったが、きちんと生徒の話を聞きながら仲裁に入れた。
- ・いろいろな児童と関わったり児童の遊びを学ぶことができたりと貴重な経験だった。こういった施設が家庭の助けになると思うため、学童の重要性も知れてよかった。
- ・子どもとかかわる機会が実習や教師になる前に少ないのでいい経験になった。
- ・児童の能力差が表れない工夫をすることも大切だけれど、分からないことをしっかりと示せるような雰囲気づくりや事前の指導

も重要になることを実感した。

- 子どもの名前も少しだが覚えることができるようになり、自信がついた。対して、子どもの対応に困ることや安全管理の大切さなど、面倒を見る大人としての責任も少し理解することができた。
- 普段の生活の中で、小学生と触れ合う機会がほとんどないので、活動の中で子ども達との接し方や子ども達をどのようにまとめたらよいかなど、たくさんのことを学ぶことができた。
- 様々な学年の子がいることで支えあったり教えあったりすることで、縦のつながりを身に着けることができるのだと感じた。
- 自然の中から自分たちで遊びを見つけて工夫しているところにとっても感心した。
- 学童の指導員の大変さややりがいを感じた同時に、児童のエネルギーを直接感じることでよかった。
- 子ども達は友達との関わりの中で様々な成長をしているのだということに気付かされる重要な機会となった。
- 学童とは、学習面や生活指導を行う学校と同じように、協調性や遊びに関するルールを遊びを通して学ぶことができる場である。
- 学校の延長線上にある放課後児童クラブについて知ることができたことは、今後の教員としての生活にも役立つと感じた。
- 子ども達と同じ目線になって、見たり考えたりすることが大切だとわかった。

5. 報告会の様子から

毎年12月には、放課後児童クラブのボランティア体験を終えた学生達が報告会を開き、活動を通して学んだことを発表し、意見交換を行っている。最初のオリエンテーションや現地説明会の時は、とても不安げだった学生が、当日はまったく違う自信に満ちた表情で、放課後児童クラブでの体験について語るのが印象的である。過去の報告会での様子を紹介する。

- 学童は子どもにとって第二の家庭ともいえる場であり、子どもが安心して遊べる工夫がたくさんある。
- 子ども一人ひとりを尊重することの重要性、察することの大切さ、子どもに寄り添いながら指導する。
- 子ども達にとっても保護者にとっても、共働きやひとり親の家庭が増えている今の社会では非常に必要な場なのだと思う。
- 理事長は「大切なのはいかに子ども達と触れ合う時間を作るかだ」とおっしゃっていた。これは教育実習にもつながる。
- 毎月誕生会を行っているがいい思い出になり、大切にされていると実感できる。
- おやつのクオリティの高さに驚いた。
- 自分ができることを一生懸命に伝えてくれる子ども達、自分の成果を披露してくれる時には、肯定的な反応をするとその後の成長の活力となりよいのではないだろうか。
- 最終日には子どもと一気に仲良くなった。
- 遊びの中の意見のぶつかり合いについては、じゃんけんや多数決で決める、子ども達自

身による問題解決へ。

- ・放課後児童クラブでの体験のまとめとして、子どもと関わる職業の喜び、成長や子どもの持つ力、子ども達の安全、交通安全、行事内容の変更、子どもを見守る視野、信じて任せる勇氣、注意する力、臨機応変に対応する能力、急な体調不良など。
- ・教員になるうえでとてもいい経験になった。
- ・学童は単に子供を預かる場ではない。学校と違って行動があまり制限されない。児童、保護者と先生の距離が近い。課題としては、学校と違い、クラス単位で分けないので、大数いる児童生徒に対して、指導員が児童生徒の一人ひとりの様子を把握しづらい。

6. おわりに 子どもと共に育つ活動の場として

今までの報告会で印象に残った発表は、「児童に着目した放課後児童クラブの役割」というタイトルの発表であった。放課後児童クラブでの体験を通して、学生のまなざしに大きな広がりを感じられ、子ども達の行動をポジティブにとらえているところが、放課後児童クラブならではの温かな視点が感じられる報告であった。以下にその一部を紹介する。

「児童に着目した放課後児童クラブの役割」

放課後児童クラブは、子どもにとって、学校とは異なる1つのコミュニティであり、様々な価値観や見方に触れられる機会になる。他の学校や他の学年の友達、コミュニケーション能力や様々な見方を身に着けられる場

であり、集団での役割について学ぶことができる。

勉強や食事、遊びなど長い時間集団で過ごす。時にはけんかや意見の対立もある。それを乗り越える力、集団での生活を学ぶことができる。遊びたいものが異なり対立する場面、これが終わったら次に別なことをして遊ぼうといったやり取りを見かけた。遊びに夢中になり周りに迷惑をかける場面では、場所を変えたり静かにできる違う遊びを始めたりしていた。

普段できない遊びを提供できる場、地域のつながりが昔に比べて減った今、様々な活動をする場が減ってきている。実際に経験したことが様々な場面で生きてくるため、多くの活動に触れさせることが大切となる。

夏祭りの例をあげれば、自然に触れることができる、五感を使いいろいろなものを吸収することができる、仲間とより交流を深めることができる。まとめとして、放課後児童クラブとは児童にとって大切な経験ができる場である。指導する側として、児童によりよい経験をさせる環境を作ることが大切となる。今回の体験的科目では、児童と多くかかわる貴重な体験となった。今後の実習や将来に今回のことを生かせるようにしたい。

上記の報告が示しているように、放課後児童クラブの体験を通じて、子ども達の遊びと暮らしについて、学びを深めている。これから教員になっていく学生達が子ども達と触れ合い共に育つ場として、今後も放課後児童クラブボランティア体験学習を続けていきたい。

最後に、本講義に協力を惜しまず多大なる貢献してくださっている群大クラブの子ども達やスタッフの皆様にお礼を申し上げます。

注

- (1) 全国学童保育連絡協議会の資料によれば、2020年5月1日現在の放課後児童クラブの入所児童数は1,305,420人であり、文部科学省の「学校基本調査」から2020年度の小学校の在籍児童数をみると全体で6,300,693人となっており、小学校に在籍している児童の約20.7%が放課後児童クラブに在籍していることになる。また、両調査から学年別の在籍数を算出すると、6年生は約3.4%、5年生約6.9%、4年生約14.3%、3年生は約26.9%、2年生は約34.8%、1年生は約39.6%と学年が下がるにつれて増加している。

引用文献

澁谷昌史, 2019, 「〈放課後児童クラブー小学校〉間連携の現状と課題ー学校が参加する地域包括支援の開口部を探る」『関東学院大学人文学会紀要』141, 39-50pp